第二章　鬼畜の森

1

小さな時のことは余り覚えていない。

玉江はおぼろげながら母の顔を辿ることはできた。いつも、母の像を描くことができずにいた。

ものごころがついたとき、すでに、養父の根岸豊吉がいた。父親の顔は知らず、母を幼少にして亡くした。

養父と二人きり、中国山脈の入りくんでいる氷の山・後山の山稜の尾根を棲家として十六歳の春まで過ごした。豊吉は当時まだ職業として成り立っていた木地師の一人で、兵庫県城崎郡日高の西気村の山奥で木を伐り、轆轤(ろくろ)を回していた木地師というのは原木から椀・盆・膳・茶道具・杓子(しゃもじ)などを作りあげる職人である。

轆轤と鉋(かんな)を使って木片を割り、一つのかたちを作り上げる。

古木や巨木などが素材になるので、いつの時代も木地師は深山に住み、また、原木がなくなると木を求めて諸国の山々を転々とした。

いわゆる、あるき筋といわれるもので、行者、山伏、聖(ひじり)、毛坊主、御師、巫女、比丘尼、遊女、猿回し、人形回し、万歳師などと昔から同列に倣(みな)されてきた。

タタラ師(鉱山師)、マタギ、山窩(さんか)、杜氏(とじ)、木地師などという系列で呼ぶ場合もある。木地師は“山の漂民”などとも称された。

大正の末から昭和のはじめにかけての時代のことだから、日用の什器類はまだ木工品が受け入れられていたのであった。

西気村の東河内集落、三原集落、それに隣りの

万劫地区、また鳥取県境から中国山脈の尾稜部の山中にも多く木地師は分在していた。氷の山、沖の山から蒜山（ひるぜん）大山（だいせん）にわたる北の山地が、昔から木地師の里として知られる場所である。

玉江の母はるは三十の齢を越したばかりのある日、急性の肺炎に罹り、根岸豊吉の山家に辿り着いた。長して知ったことだが、母のはるは小間物の行商をしていたという。

いまでいう日用雑貨、身の回りの品を背に但馬たじまの山間部を歩いたのである。

木地屋は五軒、西気地区に集まっていたが、なにしろ三原の山裾野の住まい、一か所といっても大抵は山越えか、谷向うの家、どこも一軒家と変ることはなかった。定住のつもりもなかったから、どの家も小屋掛けに等しい造りで、それぞれが勝手な場所に掘立小屋を建てて住んでいた。

はると豊吉が、男と女の関係にあったことはほぼ間違いない。変り者で通してきた豊吉は四十を半ば過ぎているのに、嫁をもらわず、ずっと一人暮らしだった。里から山奥に嫁に来る女がいなかったせいもあるが、木地師仲間とも疎遠にしていたので、豊吉のところには、仲間うちからの縁談話もなかったのである。

木地師仲間は木地師同士で縁組みを持つのがこの世界の習わしであった。

豊吉は腕の立つ職人で通っていたが、それだけに偏狭なところがあり、うまく仲間とはとけ合うことがなかったのだ。

まだ初冬のある日雪がちらつき始め、風の冷たさにはる母子は道中難儀した。

峠を越す頃には日も暮れ、雪が視野を閉ざし始めた。ともかく根岸の家へ行けば…。その恩いがあったのはそこに一人の男がいたからである。根岸豊吉とはもう三年の付き合いになる。初めは商いのために立

ち寄ったが、辺境の地にあるので、泊って行くことが多くなった。愛をたしかめ合っていたのではないのだが、はるは心のどこかにときめきの情も持った。

この日、風邪をこじらせ、高熱に苦しんでいたのに、無理をして、はるは寒中の強行軍に身を賭した。

この一途な想いは、男に会いたい女の一念によっても支えられていた。

「な、もうすぐや、玉江の体冷とうなってしもうたな。あっこに行ったらお風呂も沸いてるで。すぐにあったこうなれるで」

ことばの端々を玉江が覚えているのではない。

いまになって、ふっといつも豊吉のところではお湯に浸ったことを思い出すのだった。木舟の風呂で、いまもそれは変らない。

大人の考えを持つようになってから、はなやいだ母の声を思い出した。いつも母は一風呂浴びる時、機嫌がいいのだった。

後々になって考えたことだが、男と女の愛の営みがあったと考えるほうが、玉江には自然のことのように思えた。

結局、峠越えして雪中をむりをしたものだから、この時、はるは肺炎を併発し、辿り着いた翌々日に呆気あっけなく死んだ。医者を呼ぶにも山中のことで叶わなかった。

はるの遺言で、玉江は豊吉の養女として育てられることになった。数え年で五歳、はじめは泣いてばかりいたが、すぐに慣れた。母はもいなかったが、山道を引き立てられる辛さがなくなったことで〈子供ながらに新しい生活に納得したのである。

読み書きは、豊吉が教えた。

「おまえ猿のようやな。女の忍者みたいに身が軽い」

養父は活発な女の子に眼を細めた。それでも完全に人里から隔離されていたのではない。

富山の薬売りや小間もの売り、時には衣類を背

にした行商の連中も顔を出した。
それに養父に連れられて豊岡に出かけることもあった。北辺、日本海よりにひらけた街である。
豊吉が作った椀や盆などを大きな風呂敷包みでからげて　街に出ることがあるので一緒にお供したのだ。集荷業者は滅多なことでは山奥まで足を運んでは来なかった。
豊岡は蒲柳製品で賑わった街であった。
柳行李はいまでいうトランク、衣裳箱。それに柳籠や、目新しいところではバスケット手籠などもあった。
玉江は、白木地のバスケットを豊吉から買い与えられた。コリヤナギが原料で、柳の枝の皮をむき乾燥させる。しなやかで、かたちに編むのに適した。
きっちりと編み目の揃ったバスケットは玉江のお気に入りのものになった。
色が白く、眼元の愛くるしい少女はどこへ行っても人気者だった。
赤いリボンを柄えのところに結んだバスケットがよく似合った。山家の猿などではなかった。
いつの頃からか、玉江は一人で家で留守番をさせられることが多くなった。
豊吉の頭の中には別のことが用意されていた。
街の華ややかな面を見せることは、山奥の暮らしに、いつか、倦(うむ)ことだと考えた。
“このオナゴはいつかここを出て行く”豊吉は玉江が十歳を越えた頃からそんなおそれの気持を持ち始めた。
それに山を降りればやはり女の肌が恋しくなった。
小さい頃は気にならなかったが、紅灯の巷に玉江と一緒に足を踏み込むのは気がひけた。
玉江は穢れのない美しい少女だった。
白木地の製品を塗師ぬしの手に渡す時はいつも自分の作品が穢されるような気がした。
その気持と似ていた。

漆を塗り、磨かれて美しい什器になるのに人の手にかかるのが癪(しゃく)だった。

無垢のものに他人の手は不要だと思った。

椀のかたちや、盆などの円さ の感じは白木地のままでこそ美形なのだと彼は頑なに信じてきたのだ。

俗世間の手垢に、美しい少女がまみれることは決して快いことではなかった。

玉江が十三歳になった時、わざわざ、宮津まで出かけ、豊吉は振袖の着物を玉江に買い与えた。

大量に安物の木地製品を引き受ける約束をしたので、手付金が入ったのだ。

丹後の宮津は天下の名勝天の橋立があることで知られる。この地で玉江は足元近くに海の水を見た。

重畳(ちょうちょう)たる山塊の折り重なる但馬の山々の向うに海を望むことはできたが、足元で見たのは初めてのことであった。

天の橋立の観光コースに親娘連れで参った。

実の親と娘のように他人には見えた。

実の父親については聞かされていなかったし、顔を見た記憶もなかった。玉江は豊吉のことを実の父親ののように思っていた。

ちょんまげ姿の駕籠かきが、「ほいささささ」と掛声をあげ客を運んだ。記念写真屋がいて、天の橋立の景勝地を背景に豊吉と玉江も写真を撮った。

あとにも先にも子供の頃の写真としては、たった一枚のものであった。

そんな優しさも示したのに、日高の山にもどったら、豊吉は人が変ったようになった。

集荷業者から「先銭」を受け取ったために製品を大量に作らなければならなくなった。

豊吉はその頃、気持が荒んでいた。

酒を食らっては玉江にも乱暴を働くようになった。

やたら、仕上った椀型や茶道具たどの木製品を手斧(ちょうな)で叩き割った。危害が加えられそうで、

そんな時は、いち早く、玉江は自分だけの秘密の場所に避難した。

「なんでわしの作ったものが五十銭なんじゃ。京都のな、竹良たけらちゅう男の作ったもんは一個が五円もする。え、わしの作ったもんとどこが違うのや。こっちはな、わしがこの眼で選んだええ木を使うて丹精込めて仕上げとるのや」

木地師仲間では根岸豊吉は誇りの高い男の一人だった。木地の仕事は、板もの、挽きもの、曲げものの三つに大別される。板ものは箪笥などの家具に小物類、いわゆる指物師の範疇に入る。

兵庫県の北部地方は京の都とも近い位置にあるから、京寄りの街に指物師なども多く、板ものの評価もかなり高かった。

挽きものは原木を挽き割りし木を刳くりぬいて作るから割りものともいわれた。曲げものはわげものとも言い、素材を薄くして円形に曲げ底を作って容器にする。ものを蒸す蒸籠せいろなどはこの曲げものの一つであった。

根岸豊吉は刳りもの師としては一流の評価を得たのだが、都に住まぬものだから損をしていたのである。

名人など、ともてはやされたので、竹良の所には人が集まった。こんな山中に名人を訪ねて来る粋人などいるはずもない。

年がら年中、仕事場にいたが、工賃が安いので〈豊吉と玉江の暮らしむきは楽ではなかった。

時の流れも少しづつ、木地師の世界を変えつつあった。元は将軍のお墨付きをもらい、山野の出入り、関所の通行も自由、諸役、関税も免除された職分なのに、明治維新後、山地の所有権が確定し、勝手に木も伐れなくなった。

里地に近い隣村の万劫地区ではすでに木地師を廃業する者も出ていた。木地師にとっても生き辛い時代になりつつあったのである。

結局、豊吉は時間のかかる一品主義をやめ、安もの作りに精を出すようになった。

見様見真似で玉江も養父の仕事を手伝った。

この時期、明らかに豊吉はおのがこころを売っていた。けやき、えんじゅ、とち、ぶな、くわ、くり、かき……材質の硬いものが木工品の素材として選ばれた。

『そうか、木地は生きとる。乾いとる時期には肌も乾く。雨の季節になればじゅくじゅくと濡れとる。根っこを切られてもな、ちゃんと木は息をしとるんじゃ、よう覚えとけ。木地師が、木のことがわからんようなったらおしまいじゃ』

それがこれまでの豊吉の口癖だった。

山から伐り出してきた木は何年もかけて自然乾燥させていたのに、豊吉は山筋に流れる川に原木を浸した。そうすると、材質が軟らかくなって作業の能率があがるのだった。

自然乾燥させるのは仕上った製品に歪みが来ないようにするための細心さだったのに、もはや、豊吉は歪みを考えない人間になっていたのだ。

量産主義に切りかえた豊吉は朝三時になると起き出し毎日、がむしゃらに働いた。

玉江も付き合わされた。

眠い眼をこすって起き出すと、すでに豊吉が暗い板の間にローソクの灯をともしていた。

荒削りの手斧の刃音が、ざっくざっくと聞えて来る。朝一番から轆轤を挽く音も耳にすることができた。ちょうど東の空から朝陽が昇り始める頃、一本のローソクは燃えつきた。

それからやっと朝食になる。

玉江はもう二つ、養父の変な仕種が止んだのに気が付いた。山の斜面のすぐ下に住まいはあった。

裏手に三本の柿の木があった。そのうちの一本は樹齢が古く、樹幹は両手で抱えるほどもあった。

変な仕種というのは玉江がものごころついた頃から

ずっと、豊吉は柿の木の幹に何本もの五寸釘を打ちつけていたことだった。
それが、近頃は見向きもしなくなった。
錆びた五寸釘を何本も打ち込まれた柿の樹幹は満身創夷(まんしんそうい)の身だったが、それでも秋になると、たわわに熟柿の枝を張った。
そんなことしたら柿の木がかわいそうやわ」
子供なりに、玉江は何度か、抗議したものだった。
あのな、これは黒柿というそな、まあ、よう聞いとけ」
何やら、豊吉には珍しく注釈を付けた。少し、得意、な口ぶりでもあった。
「ないしてや、いじめてやったらな、木が苦しいもんやから傷口が、黒うなって得難い木になるのや。そやな、あと何年待てばええやろな。そや、玉江が嫁さんになる頃のことやろな。黒い血が流れてるみたいに、木地に血が渦巻くのや。柿のタンニンがな、黒い模様を作ってくれるのや」
一週に何度かは、五寸釘の具合いをみたり、錐を樹幹に突き立てたりもした。
それなのに、豊吉はもう関心を向けなくなった。
自分のこころに釘を立てているような荒ぶった日々を過ごす男になった。酒を呑むことが多くなり、玉江にも辛く当った。
風呂の湯加減や食事の用意、気にいらないと大声で怒鳴り、時には玉江に対して手を振り上げた。
仕事の場でもそうだった。見様見真似の手付きで、あれこれ作業をしたが、のろいと言われ、よく木片が飛んで来たりした。
玉江は活発な女の子から、いつか無口な少女になっていた。薄暗い森の斜面で見つけた木株の小さな洞穴を自分の秘密の場所にしたりした。
豊吉が荷を負い山を下った時などは、夜でもこの洞で過ごしたりした。
夜になると、ふくろうが樹上で、ほうほうと鳴いた。

もちろん、獲物を襲う時のきき‐と鋭く叫ぶ声や、荒々しい羽音も聞いた。

昼間は寝呆けているのに、夜になるとふくろうは急に夜の帝王になり我が者顔に振舞った。

山中の真暗闇の中で夜を過ごすには普通なら恐怖心があるが、小さい頃から夜の闇に慣れた玉江には一向に苦にならなかった。

仕事がのろいと言われたが、それでも玉江はこの家ではいっぱしの働き手になっていった。

俗に木地師は木取り三年、道具打ち五年と言われた。木を刳る道具も自分で作る。

木地師の使う刃物は荒削り用の手斧を除けば、あとは鉋かんな類になる。

もっとも、鉋といっても一枚板を平らにする時の大工用のものとはちがう。切出しナイフのようなかたちのものから、先端部が曲がった刳り専門のものまで、みんな特殊な道具類であった。

なにしろ堅い材質のものを刳るので、刃先の焼きの技術が求められる。

かならず、フイゴにくべる炭は栗材でなければならなかった。この炭を焼くのは玉江の仕事であった。

栗の木を切り、粗朶を集め、炭焼小屋で玉江は一日を過ごすこともあった。

そんなある日、玉江は初潮をみた。

驚いて炭焼小屋から、家に帰り青い顔をして寝ていたら、養父が白い布を裂いて、黙って差し出した。

だれにもな、女にはだれにもあることや。心配せんでもええ」とだけ言った。

玉江には何の知識もなかった。

悪い病気にでもなったのかと、一人でおののいた。玉江が十四歳になった春の日のことであった。

ある夜、玉江は酒臭い息に気付いた。秋も終りの頃で、肌寒さに玉江は布団に顔を埋めていた。豊吉の指が、玉江の黒髪を撫でていた。

父親のやさしさがその行為には込められているように思えた。うっすらと、玉江は眼を開けた。

口元で笑いを表わし、玉江はそのやさしさに応えた。あわてて豊吉は手を引っ込めた。ばつの悪そうな顔になり、隣室に消えた。風呂をたてるのは一週に一度のことだった。粗末な板囲いの小屋の中に木舟の風呂が据えてあった。

カシの木を二枚合わせにしたもので長方形をしていた。やっと足が伸ばせる程度の大きさである。

風呂釜から二本の鉄の管が通っていて熱い湯がそこから流れ込む。一部補修してあったが、母のはるがこの家を訪うた頃と余り変っていない。

母が死んでから十年近くが経っていた。

玉江は胸のふくらみに気が付いていた。乳腺がこりこりし、痛かった。娘らしい体つきになっていた。

なにか、秘密のことを嗅ぎとったような気になる。なよなよした陰毛がすでに生え初めていた。

どや、もっと薪まきくべたろか」

と、声を掛けてきた豊吉がこの頃は気安く声を掛けなくなった。背中も以前のようには流してくれない。

ええ、娘はんになるわ。なあ、ちょっぴり色気も出てきたでえ」

たまに来る行商の男たちがそんなことを言おうものなら即座に、その男を豊吉は追い返した。

「あほか、俗世間の奴らはみんな毛虫みたいな奴らばかりや」

吐き捨てるように豊吉は眩いた。

玉江はある日、豊吉の眼が、板塀に張りついているのに気付いた。 まだ、はずかしいとは思わなかった。

父ちゃん、ちょっとぬるぬるなってるウ」

様子を見に来たと思ったので、玉江はいつもの調子

でしゃべった。ひとり、豊吉だけがあわてた。

が、ある日を境いに、玉江は、豊吉の存在を意識するようになった。

山中のことで、食糧品や、身の回りのものは峠を三つ越えて一月に一、二度玉江が買出しに出かけた。

栃本やちもとに、何でも揃えた商店があった。

山越えで三時間、片道の道のりだから帰路のことも考えると往復だけでも半日を費やすことになる。子供の頃から山野は歩いているので、平地と同じ速さで歩くことができた。酒好きの豊吉のために、かさばって重い、一升壜なども背負って帰ってきた。

朝早く発ち、栃本の村には九時すぎに着いた。

河内屋の屋号のかかった店はまだ閉まっていた。

大きな家なので表から声を掛けても通じない。玉江は裏口にまわった。田舎家のことで戸締まりは不用心なままであった。玉江はどうしても贖あがなうものがあったので勝手口の前に立つ。

と、女の泣くような声が聞えた。台所口の土間が木の扉の向うにはあるはずであった。上り框かまちの縁に腰掛けて前に熱い茶を馳走になったことがある。木の扉には縦目の破れ穴があった。

「声を掛けてはいけない」

そんな思いがあったので中の様子を窺った。男と女のもつれ合った姿があった。着物の裾を大きくまくられた女の白い尻が見えた。剥き出しになっていた。

男が股引ももひきの間から突起した大きなものを突き出していた。女は後ろ向きで、土間に両足をつけている。藁草履の足先がしっかりと土を踏んでいるのまで見えた。女はこの家の女房であった。

男は誰れだか玉江にはわからなかった。

やや斜め、男の横顔は見えていたが知らぬ顔だった。酒造りの杜氏とうじの仕事をするためにこのあたりの男の多くは、秋の終り頃から、出稼ぎに行く習慣があった。灘や北陸などの酒どころの蔵元に

出かけて行くのだった。
この家の主もこの季節になると家を明ける。
玉江は息を詰めた。
土間には朝の光が入り込んでいる。もう土間の暗さは払われていた。
丸くて白い女の尻がせわしなく前後に揺すられていた。男と女が体をつないでいた。見てはいけないものを見た思いで玉江は破れ目から眼を離した。
しばらくなすすべもなく勝手口の傍に立っていた。
女の泣き声が激しくなったので気になり、また玉江はのぞき込む。藁草履の爪先が立ち、縁を掴んだ女の両手に力が込められている。
男の腰がなお一層に激しく振り立てられていた。
奥さん、ええ気持かあ、ほれえ、もっと突いたるぅ。ほれ、ほれえ…」
「ええんや、すごいことええんや…」
そのたびに、うわ言みたいに女は淫らなことを口にし、腰を左右に揉んだ。
「ふ、うふっ、うう……」
泣いているのではなかった。女の尻に男の下半身がぶつかる度に、よがりの声は高くなった。
「大間はな、これやってる時がいちばん幸せや」
やがて男のほうが呻き声をあげた。玉江はちゃんと最後まで見届けた。男が腰を引いた時、棒状のものから白い湯気が立ち昇った。
女の尻がこっちを向いている。黒い飾り毛の下辺に穿(うが)たれた裂口部があった。さっきまで男のものを受け入れていた、それは肉の穴であった。
大人の世界の秘密をこの時、玉江は知ってしまったのだった。

3

熟柿が落ちて、山間には雪が降り積もった。

厳しい冬の到来であった。二人だけの正月を迎えた。この年は初めて玉江は晴れ着姿で着飾った。

豊吉が慣れぬ手付きで着物を着せてくれた。

金糸銀糸が織り込まれた小花の模様が裾に散っている。赤い染めの地に娘らしい可憐さの花が咲いていた。豊吉が晴衣を着ることを初めて許してくれた。とても嬉しかった。

急に華やいだ気分になり、何か大声で叫びたくなった。着物を着終ったら今度はおしとやかになった。

正月の膳を運ぶのに、裾が絞られて足元がおぼつかなくなった。大人になったような気分もあった。

豊吉が五十四歳で、玉江は十五歳、数えの年読みだったが、また一つ齢を重ねた。

にしんの昆布巻きに、京風の鳥味噌仕立ての雑煮、山菜に猪肉の料理も揃えられた。

なにを思ったか年の暮れに豊吉は、あのクロガキの樹を伐った。その切口には黒い血が渦巻いているかのような黒い紋様が表わされていた。雪をかぶった樹が、どっと倒れる時、豊吉の背は久し振りにしゃんと立った。その後ろ姿を見て、玉江は鬼気迫るものを感じた。何日も何日も、飽かずに豊吉はクロガキの木地を撫でた。なにかに取り憑かれたような眼をしていた。なにやら、豊吉は決意しているふうだった。

正月の祝膳のかたわらに一升壜を据え、なにもしゃべらずに豊吉は茶碗酒をあおった。

とっぜん、玉江のほうに顔を向け、

おまえ、わしの嫁さんになってくれへんか」と、突飛なことを言った。

嫁はんと言わずに、嫁さんと言ったところに玉江は特別の意味を感じた。が、玉江は答えられず、一瞬、眼を宙に泳がせた。

お下げ髪の少女は赤いリボンで髪を飾り、錦糸織りの花模様をあしらった晴衣を着ていた。

小さいながら、それは花嫁衣裳のいでたちにも見え

た。うっすらと頬に紅をさし、生れて初めて豊吉に教えられて口紅を引いた。母のはるが残して行ったものだと豊吉はその時告げた。

あのな、これはお前の母ちゃんの言いつけや。玉江が大きうなったら、わしの嫁さんになるようにな、母ちゃんは言い残して死んだのや。近頃な、よう母ちゃんに似てきた。わしら一つ家に住んで、これまで仲よう暮らしてきたのやからな」

玉江は箱膳の煮しめ料理に伸ばした箸の手を止めた。黙って低い天井を見上げた。

粗削りのあらけずりの棟木が何本も渡されている。煤けて黒くなった天井、梁はりの頑丈さ。粗い竹組みの壁には蓑笠とわら靴、そして畑を耕すための農具などが掛けられていた。

鴨居の上には一挺の猟銃もかかっている。

「やか、わしの嫁さんになるのや」

今度は強圧的に告げた。やっぱり玉江は返事ができなかった。それっきり豊吉は黙ってしまった。

しきりに茶碗酒を口に持って行く。

この日は外は雪で、時折り、重さをはね返すのか、ぱさっと雪を振り払う竹の幹のしなりの音が聞えた。雪だけがしんしんと降っている。

どこにも冬の風音はなかった。

そんな静けさのある正月の一日であった。

冬の間、この山麓の部落と里地とは往来を絶たれる。積雪の量が多いからここは陸の孤島になってしまうのだった。正月を祝う客の姿もない。

豊吉と玉江だけが板の間で対座していた。

いきなり、豊吉が立ち上がった。

来い！わしと一緒に来るんや」

茶碗酒がこぼれた。足元に転がる。

玉江の右の手首を豊吉が握った。痛かった。

板床のすり切れたござの上に押し倒されていた。

ええか、きれいなべべ着物がわやだめになるよって

な。じっとしてなあかんで。なっ、男と女はな、結婚したらみんなやることや」

あお向けになった玉江の着物の裾を、豊吉は少しずつめくっていった。初めて履いた白足袋の足が二つ、豊吉の眼の前にあった。

なにをされるのか、玉江にはわかった。

いつ、かの男と女の営みの様が、瞼の裡にふーと甦ってきた。恐いわけではない。

それなのに体が小刻みに震えた。

着物の裾が絞られた。それで赤い腰巻の上に白い下半身だけが置かれた。

わずかに黒いそよぎが三角地帯を飾っていた。

豊吉は二、三度まばたきした。生唾をのみ込む。

おーっ、玉江ーっ」

と、獣のように雄叫びし、少女の股間に顔を埋めた。愛しいものにしがみつくように、豊吉の舌が少女の恥部を舐めた。いつまでもいつまでも……。くすぐったい感じがしたのは初めだけで、あたたかい舌先の感触はちゃんとそこになめらかな快感を授けてくれた。筋目に添って何度も舌が上下する。

じっとしているつもりでもやはり腰が逃げていた。

結局は壁際まで逃げた恰好になり不自由な姿勢を強いられる。それで一計を案じたのか、豊吉は玉江の体の上に乗ったまま後ろ向きになり坐り込んだ。玉江の顔の上に、豊吉の尻があった。

妙な恰好であった。

豊吉は逆方向から玉江の両腿を手前にと引き寄せた。これまでやさしかった豊吉が急に兇暴になった。まだ男を受け入れていない開口部に、豊吉は指を突き入れてきた。痛かった。

二度、三度と‥玉江は苦痛を味わわされていた。

痛いか、え、痛いんか…」

傷めつけることに快感があるような口吻りだった。

思わず、玉江は首を左右に振り、豊吉の体の下

であがいた。はねあげた両脚を一度向う側に投げ出す。従順な女ではなくなっていた。

その拍子に、豊吉の膝頭が強く、玉江の鼻梁を打った。体を移動させた時にしたたかにぶつけたのだ。

「うーでいーんと鼻の頭に疼痛が走った。

あまりの痛さに息ができなくなった。

手をやったら鼻血がのたりと出ていた。生臭い味がした。唇の端から血が口中に流れ込む。

後ろを振り返り、その様を見た豊吉はなおのこと猛った男になった。

玉江の着物の帯をもどかし気に解いた。

見る間に裸に剥かれた。まだ小さな乳房だったがすでに女のかたちをあらわしている。

乱暴に掴みとられた。乳頭を強く吸われたので痛かった。鼻から血を噴き出した少女、その傷ましい姿を見て豊吉は異常興奮した。

すべすべした白木地の肌を刃物で傷つけたような気になる。いや、クロガキの木肌に打ち込まれた五寸釘の痛さのことを考えていたのかも知れない。

豊吉は、猛った男のしるしを、むりやりに股間に差し向けた。少女の貝殻に似た部分は固く殻を閉ざしていた。何度か、結合の機会を失した。豊吉は指を一本、差し入れた。痛さに玉江はうめいた。

豊吉はおのれの指先に血の色をみとめた。狙い定めた男のそれが、血の滲んだ狭間に一気にすべり込んだ。歯を喰いしばり「ぅーむっ」となったまま玉江は耐えた。両手の指が豊吉の二の腕をとらえる。爪が皮膚に喰い込む。引っ掻き傷をそこに作っていた。

玉江が女にされたこの日の夜から、豊吉はあのクロガキの木で茶道具を造り始めた。

いじめにいじめ抜いた木肌は苦しみの血を吐いていた。この世に一つしかない苦しみの紋様、いじめ抜いただけに、クロガキに寄せる豊吉の愛着もまた一入（ひとしお）だった。

一か月、二か月…。豊吉はこの茶道具造りに熱中した。安物作りの仕事に見向きもしなくなった。

集荷業者の一人が山中まで来て、

先銭の分はちゃんとやってもらわんとな」

と、まくし立てていったが豊吉は取り合わなかった。

一つのかたちを作り上げることに、豊吉は凄ましいほどの執念を見せたのだった。

狂おしいほどに、来る夜も来る夜も、豊吉は玉江の肉体を求めた。熱い心の火が燃えさかる。

「のな、丸いかたちが欲しいのや」

そう言って豊吉は、玉江の女のかたちを撫で回した。指先でなぞられた丸味が茶道具の棗なつめや、茶櫃ちゃびつつに写しとられた。

だが、玉江にはまだ苦痛だけしかなかった。

豊吉はやさしさを示す反面、兇暴な男になった。

女の体をいたぶることにも執念を燃やしているようだった。

4

クロガキの木肌を生かした茶器、茶櫃、棗の作品展が、京都で開かれた。その名工品評会で、根岸豊吉の作品は評価され、特選入賞した。何かに、憑かれたように豊吉は作品を仕上げた。

竹良に負けてたまるかい。あれは俗物や。山におらんと木の鳴く音は聞けんで。人の声聞いたら余計な声がしよる。木地ちゅうもんはおのれで育てて、おのれだけで型を完うせにゃ歪んだものになりよる。ほんまはな、あの作品、人目にはさらしとうなかった。そやろ、わしは命の樹のクロガキを伐ってしもた。あの樹とはざっと三十年余の付き合いじゃった。育てた樹にな、玉江、お前のその丸い女の体を写しとったのや。魂が入ったる、わしとお前が夫婦になったしるしにな、わしは精魂込めたのや。俗世間の奴らに、わしの腕がわ

かっただけでええ。売ってくれて言われてもわしは絶対にあの品物だけは売らん。そうやろ、お前の裸をな、人目にずっときらしてるようなもの や」

と、豊吉は入選の知らせを受けた時に、玉江に言った。一冬、土中で寝かせた楢ならの葉で、豊吉はこの茶器を磨いた。柔らかな葉脈だけの楢の葉は木肌を 傷つ けないので、茶器にはつ やだけが浮いて出た。

この頃になると豊吉のこころも和んだものになった。

豊吉と玉江は夫婦のように暮らした。

一緒に湯に入り、たわむれもした。急に、玉江の体も女らしくなってきた。従順な女にもなっていた。

木地師にまつ わることばとして昔から、木地屋の宿替えというのがある。

これは原木を求めて山を移動することで生れたことばだが、、もう一つ、色白の腰太という文句も豊吉は知っていた。玉江もそんな女になってきた。

『雲文後風土記』なる書物の中にはこのことを記した一節がある。

『木地師は男女とも深山の小屋にのみ住みぬれば、日々、日光に照らされず、世に出ても深山故、疱瘡ほうそうにも犯されず、自然男女とも顔色白く、尻腰大なり。故に顔色白く腰太き女を俗 に木地屋の娘なるべ しといふ』

玉江は豊吉に抱かれて寝るのが、とても快いものになっていた。憑かれたようにクロガキの茶器造りに没頭していた頃はむしろ苦痛であった。

おのれの罪科を隠そうとでもするように豊吉は、玉江の体を乱暴に扱った。男の体に憤れないから快感だって体の内から沸いては来なかった。釘を突き立てられるように玉江はいたぶられていたのだ。

まるで荒木地を削られ、手斧で余計なものを削り

とられていくようなものだった。
足下に据えられ、面打ちをされていくうちに、なめらかな円型が彫り出され、やさしい線が現われる。あとは木地師の意のまま、一つの命が生み出される。
考えてみれぼ、木地から仕上げたものは、みんな女体のふくらみを思わせる造型のものばかりであった。茶器に椀、お盆、菓器、みんな根岸豊吉の作り出すものは円型によってあらわされていた。
春が来て、やがて初夏の明るさがあたりには充ち始めた。生まれて初めて、あたたかくて快いものに包まれた。玉江に母のはるのことはわからなかったが、人間のやさしさのようなものが性の行為の中にはあった。触れ合うことの嬉しさである。
豊吉には、日毎に花開いて行くこの少女の体がはるの血を受け継いでいるように思われた。
多情な女であった。硬い陰毛の密生した股間のことを豊吉は思い出した。次の逢瀬のために、はるは数本の陰毛を懐紙に包んで彼に渡した。
いつも思いを相手に残して次の行商に出た。
どの男にもこんなことをするのかとまだ若かった豊吉はその時考えたものだった。
玉江の実の父親が誰れなのかは知らない。
小間物が売れない時は路銀にも困る日が続く。大低は、はるが、この日高の山奥の家に来る時は持金が淋しい状態の時であった。実入りのいい時はわざわざこの山中までは来ない。その点は薄情な女でもあった。子持ちの女は、三日ほども逗留して行った。
その間、今度はいつ来るか知れたものではないので、豊吉は、はるの肉体に貧りつき、精魂つき果てるまで抱いた。ある時などは、むずかる小さな玉江が邪魔になり、裏の柿の樹に縛り付け、泣きわめくのもかまわず、女の体を求めた。
その柿の樹はもうない。
たしか、ひょろりとした樹だったが、十余年がたって立

派なクロガキの樹になった。
今は茶器に作り変えられ、豊吉が朝晩、賞でるものになっている。いまは、はるの性情をそのまま示し始めた女が豊吉の眼の前にはいた。
どこか、薄い恥毛だったが、まちがいなくはるにそっくりな黒々とした密生の様を示すことだろう。
日、一日、玉江は女らしくなり、色白で腰太の木地屋の女になって行った。
そんなある日、木地師仲間の男に連れられて、十五歳の若者がわざわざこの山中までやって来た。
若者の名は図師衆三といった。珍しい名であった。
「あんたの、ほら、京都での評判がええもんやから。これがあのクロガキの茶器を見てな。えらい感激しよってな。そいでぇ、ぜひあんたの弟子にしてくれと言うてるのや」
二間に仕事場だけの家のことだから、台所の土間にいた玉江にも話の様子は窺えた。
「なんや、いきなりそういう話かいな。わしは弟子など、とらんでえ」
あまりにきつい口調だったので、玉江は思わず振りむいた。豊吉は癇かんを立てていた。
両の拳が打ち震えているのが見えた。
何故だかその時は玉江にもわからなかった。
木地師仲間の男と少年は後ろ姿だけが見えていた。重苦しい沈黙が続いた。
初めて会った時、玉江の胸はときめいた。
耳の大きな、聡明な感じの少年で、きりっとした顔立ちをしていた。
「そないに言われたらどもならんな。こいつはな、生野の在で、京都の集荷問屋の丁稚でっちやってたんやが、親兄弟ものうてな……」
「なに言うてんや。そないな話聞いたかて、わしは知らん」
「まあまあ、もうな、京都の店は辞めて来たんや。どうして

も一人前の木地師になると言いよる」
ほな、よそへ行け。わしは弟子などとらんて言うてるやろ。もう帰ってくれえ！」
豊吉の顔面が紅潮した。
こめかみのあたりがぴくぴくとした。
「おしゃ。今日は帰らせてもらわ、そやけどな。あんたとこかて、跡取りがいるのんとちゃうか……」
そう言った男は、湯茶を持ってきた玉江のほうに、ちらと視線をむけた。
「あほがっ。ええかげんにさらせ。なにぬかしとるんじゃ！」
火に油を注いだ。
言外に、男は若い二人がお似合いの男女だと匂わせたのだった。凄い権幕で豊吉は立ち上り、男の胸倉をとると、むりやりに戸外にと連れ出した。
「もう来るな！ええか、何度来ても、わしは叩き出したるぞ！」
まさしく鬼面そのものの形相になり、豊吉はわめき散らした。ほうほうの態で、二人は逃げ帰った。
男たちが帰ったあと、まだ真昼間なのに、狂ったみたいに豊吉は玉江を引き寄せ、体の上にのしかかってきた。
「ええか、どこへも行くな！他の人間なんか信用でけんど」
気持が高ぶっているせいか、豊吉は玉江の体を荒々しく扱った。若い男の姿を眼のあたりにしたせいか、体の奥から突き上げるものがあった。
妙に玉江も興奮していたのであった。

5

クロガキの茶器は凶事を呼んだ。
若い男を呼び寄せたことで、おそろしい結末が用意されることになったのである。

図師衆三は、断わられても断わられても一人でやって来た。弟子入りを果すことに命を賭しているようなところがあった。

なお、豊吉は狂い、この頃は、土下座して弟子入りを乞う若い男を足蹴にもした。

“この男、玉江を目当に来とるな”そんな嫉妬の思いが頭の中で渦巻いていた。

ある日のこと。裏山の炭焼小屋で炭を焼いていたら、ひょっこり図師衆三が玉江の前に姿を現わした。

追い返された日、雨が降ったので一度、彼はこの炭焼小屋に無断で泊ったことがあったのだ。一筋の煙が上がっているのを見て裏山への道を辿った。

「なんど来てもあかん。なあ、なんかええ方法はないやろか、教えて欲しいのや」

本当に衆三は憔悴しきっていた。今から豊吉のところに何度目かの弟子入りを乞いに行くという。

豊吉の乱暴さに、本当にこの時は衆三が可哀想になった。男はしょげ返っていた。怯えた顔もしている。

「わしにもわからん」

それだけしか言えなかった。粗朶(そだ)を焚口に投げ込むといっとき炭焼小屋に煙がこもった。

ぱちぱちと小枝が爆ぜている。

秋の終りのことで外は少し寒かった。

炭窯の熱で小屋の中だけが暖かい。

玉江は半袖シャツの姿になっていた。

色白の腕が衆三の眼にとまった。

力仕事をするので上腕部が太く、また、坐って轆轤(ろくろ)かけの仕事をするせいで腰が太かった。

玉江の肌はうっすらと汗をかいていた。

「なんやな、おれ、あんたが可哀想になってきたのや」

すぐ首のうしろで衆三が眩いた。

「なんで？なんでやのん？」

しばらくあってから玉江が問い返した。

「そやかて、あのおっさん、あすごいヘンクツや。なあ、

あんたにも乱暴すんのんか？」
「……」
そやけど、あんたきれいやな」
その声を聞いて玉江はどぎまぎした。
男の視線を体中に感じていた。
「あのな、木地師の連中はな、あんたらのこと、あれは夫婦や言うてるで。そんなこと信じてへんけど、この頃な、おやっさんみてたら、ほんまにそうやないかと思えてきたのや」
「ふん、こんなとこで一緒にいたらおこられるわ。あんたかてそうや」
「ああ……わかってる」
衆三はちょっと照れ臭そうに笑った。
若者らしくひょいと踵を返し、山の坂道を駆け降りて行った。
間もなく、坂道を下った山麓のあたりで、銃声が鳴った。二発続いて、ずん！ずん！と山間の空気を揺るがした。
あわてて、玉江は、炭焼小屋から飛び出す。足下の踏分け道のあたりを見ると、衆三が転がるようにして駆けていた。衆三に同情心が沸いた。男の匂いを嗅いだ気になり、さっきまで、衆三が立っていたあたりを見ていた。その矢先の猟銃の音であった。
峠を越えて、月に二度は、豊吉は塗師ぬりしのところに出かけて行く。一昼夜の行程になるので、一日家をあけることになる。
豊吉の嫉妬心がますます募った。
留守の間に衆三が来るのではないかと疑心を持つようになった。ととと豊吉は、玉江の両手を荒縄でしばり、口に猿轡さるぐつわを噛ませてから街へ出かけるようになる。
玉江を連れていけばいいようなものだが、人々の噂話のことは知っていた。
夫婦気取りだと思われたくはなかった。

それから、出がけに、戸板に五寸釘を打ちつけて行った。玉江は原木置場の土間に転がされた。
ここなら小便を垂れ流してもいいからだった。
猿轡が嵌められているので食事をとることはできなかった。閉め切られた暗い部屋で玉江は豊吉の帰るまでじっと待った。
豊吉が帰って来て縄をほどいてもらった時には泪が出た。そのあとの豊吉は上機嫌でとてもやさしかった。愛撫の仕方も念入りで、体の隅々に豊吉の舌が這った。体中が火照り、行為のあともいつまでも余韻が残った。

二回目の峠越えの時も同じように手足を縛られ、玉江は放置された。
が、この日、図師衆三が、豊吉の留守の間にやってきた。釘付けにされた小屋を訝しぶかり、彼は五寸釘を引き抜いて中に入った。
暗い片隅で縛られたままうめいている玉江を見つけ出す。人が来たことを察して、さっきから玉江は懸命に声をあげていたのだ。
「どないした？生きてんか」
衆三に抱き起された。縄目を解こうとして手を掛けた。
「うう、うう」
玉江が頭を振った。何かを伝えようとした。
衆三はまず、猿轡を外した。
縄はほどいたらあかん。そやろ、あんたが来たことがわかってしまうわ」
玉江を抱き抱えている衆三の顔がすぐ上にあった。男の体温がじかに肌に伝わった。
妙に興奮している自分に玉江は気付く。
「ええんや、こんなことにうちは慣れてる。そやけど、あんたにこないして抱かれるなんて嬉しいわ」
どこで覚えたのか、男を誘うことばを口にしていた。

衆三が他所者の男としてはただ一人の男であった。
淡い恋ごころなどというまやかしのものではない。
この男に犯されたいという思いが、はっきりと玉江には兆していた。
「な、してもええんよ。うち、父ちゃんとは夫婦みたいなものなんや。うちはな、もう男の体のことはようわかってる……」
玉江はうまく自分の気持を表現できなかった。
抱いて欲しい、そんな訴え方を知らなかったのだ。
急に男の眼付きが変った。眼が光った。
玉江の肩先を抱いていた指に力が加わる。両足首を縛られていたが、木綿衣の裾は割れた。
腰を揉むようにし腿のあたりを擦り合わせたら、白いふくらはぎがあらわになった。
衆三は、こわごわズボンをあわてて下におろした。
固く締めた揮(ふんどし)を外す手間を惜しみ、横からおのれのものを取り出す。
わけも分らず前合わせに体を預けた。
が、胸のところで前合わせになっている縛られた両手が邪魔になる上に、両脚が一杯に開かれなかったので結合はむりだった。
「あのな、うしろからしい……」
女に教えられた通りにした。
玉江の腰を横抱きにし着物の裾をまくったら何もつけていない白い尻があらわれた。もう夢中で腰を押し付けた。
やっと濡れた穴を探り当てた時、もう衆三は放ってしまった。生暖かなものが口辺のあたりを濡らした。
「あっ」と思わず玉江は声を洩らす。一度放ったのに衆三のそれはそのままの勢いでぐいっとぬめりの穴を分けていた。一気に体奥まで刺し貫かれていた。
米搗(つき)バッタのように、衆三は単調に腰を動かした。口一杯に何かを含んでいる気にさせられた。
若い男の怒張したそれは硬くて熱かった。

いや、とっもない大きなものを咥えている気になった。このしごきの業に玉江はすっかり参ってしまった。

凄い密着感があり、おのれの肉の壁が締まってくるのを感じとった。ぐいと下半身に力を込めたら、衆三は悲鳴のような声をあげ二度目を放った。

玉江は手足を思いっ切り突っ張りたい思いになっていたが、それはむりだった。思いを遂げようとした分だけ、手足に縄目が食い込んできた。

不自由な姿勢を強いられたことで、興奮度が高まった。ととと、三度目もねだった。

衆三は玉江の胸元に手を入れ、はじめて弾みのある乳房をつかみとった。痛いほどに握り締めてくる。たっぷり続けて三度、玉江は男の体を堪能した。

初めての経験であった。

衆三がこっそり夜陰に紛れて帰ったあと、一晩中、暗い土間で玉江は夜を過ごした。

ぬめった秘所には男の放出したものが残されていた。溢れ出ている感じが自分でもわかった。豊吉に探られたら、情事の事行きが知れるところだった。

男が来たんとちゃうか、ええ」

家に帰り着いた時、豊吉は雄の匂いを嗅ぎとろうとしたが、股間に手までは入れて来なかった。

衆三が元通りに外から釘を打ちつけていったので中に入ったことは気付かれなかった。

秋の終りから初冬にかけての短い期間に衆三とは二度抱き合った。

炭小屋の近くと、買物に出た峠道の山小屋、どちらも示し合わせての逢瀬であった。

玉江は衆三が好きになっていた。

やさしい男に思えた。

だが、どた雪が降り積もったことで、峠道の交路は断たれ、好きな男は通って来れなくなった。ことの外、この年の冬は雪が降り積もった。誰れも来れなくなっ

たので一人、豊吉だけが上機嫌だった。
針葉樹の梢が、ぶるぶるっと揺すられ始めると、待ちに待った春がやって来る。
竹のしなった強さも雪をはね返した。
あたり一面に仄かな明るさの大気がもどってきて、春は一段とピッチを上げた。
雪の溶け水が小川の水量を増やす。
清例な雪水が春を知らせるために川を下った。
隠しておいた花簪かんざしを、ある日、豊吉に見付けられてしまう。見つけられては困るので炭焼小屋に隠しておいた。それは衆三からのおくりものだった。玉江は手ひどい折檻を受けた。
どの男からのおくりものなのか豊吉にはすぐにわかった。いつからか、ぷっつりと図師衆三は豊吉の前には姿を現わさなくなっていた。
初めて二人が抱き合った日、豊吉は小さな疑念を持った。土間に転されていた玉江に喜色を見た。
人なつこそうに豊吉を見るのが常なのに、どこかうとうとした眼であった。
だが、元通りに木戸は五寸釘で打ちつけられていたので人が入れるわけはないと思った。
とつぜんに、その時の妬心が豊吉には沸いて出た。玉江は髪の毛をわし掴みにされ、部屋の中を引きずり回された。
が、それでも玉江は男の名を口にしなかった。
茶碗酒をがぶのみし、散々あばれ回ったあげくの果てに、とつぜん、神経の糸が切れたかのように豊吉は倒れ、高いびきをかいて眠ってしまった。
散々、痛めつけられたので体中にあざができた。
薪を持って打ちかかって来た時、玉江は手で払ったので、その時の衝撃で小指の骨が折れていた。
どんな時でも仕事場の道具類はきちんと整理されていた。手斧(ちょうなに、鋭利な刃先の鉋(かんな)類、どれも豊吉が研ぎ澄ました道具類である。

ござの上に大の字になった豊吉を見ているうちに殺意が沸いた。
咄嗟に、研ぎ澄まされた道具の一つを手に取っていた。先の尖った錐状の鉋が豊吉の左胸に突き刺さった。ぴゅーっと勢いよく血が噴き出した。
一メートルほども噴き上げ、ごぼっごぼっと脈音がした。すでに鮮血に染まっていた。
玉江は驚いて手を離す。真っ昼間のことであった。
柔らかな春先の陽光が外では溢れているのに、ほの暗さの残る室内には、凄惨な状景が展開されていた。起き上ろうとしてもがいている豊吉の姿を横眼で見ながら、玉江はその場を離れた。
逃げなければと、ただそれだけを考えた。
身の回りのものを整える。何枚かの着物を小脇に抱えて飛び出した。早く逃げねば、豊吉に殺されると思った。微かに、うめいている豊吉の声を聞いた。
玉江は夢中で駆け、滝水のたまる小川の深みの場所まで来た。いつも水を汲んでいる岩場に立つと、やっと気持が落着いた。
血に染まっている手指を洗う。水は冷たかった。着衣は返り血を浴びていた。するりと着衣を脱ぐ。下着にまで血は染みていた。
玉江は岩場で素っ裸になった。春の陽だけが暖かい。足先を水に浸し、丹念に、何度も顔を洗った。
急にこれまでの豊吉の仕打ちが憎くなった。
水の冷たさに眼の覚めた思いがした。
首を後ろに回し山容の動じぬ様に眼をやる。今はまだ雪の重さを山肌にとどめていた。
真っ白の雪の嶺が春の光に なお白く輝いている。
なにかが、わずかに動いたように思えた。
いや、玉江はいっそのこと山が崩れ、麓の山家を押し潰せば いいと怖ろしいことを考えたのだった。
と、その時であった。
どどどーっと地を打つような音がし、山気が揺らいだ

。裏山の頂きあたりの雪が白く舞った。
と、見る間に、雪の斜面がもうもうたる雪煙に包まれた。“あわずり”であった。
白い雪柱が舞ったかに思われた時、山全体が崩れ落ちていた。おびただしい雪の量が雪崩を打って斜面を削り取っていく。
表層雪崩は春先に起る現象で、ゆるんだ土までも根こそぎにしてしまう。根を抉られた樹木が土を掘り起してしまうのである。
玉江は、かたわらにおいた信玄袋を握り締め、川の下流を目指して走った。また、素っ裸のままだった。
ちらと後ろを振り向いたら、雪の塊りが家の屋根を押し潰すところだった。

6

玉江は、江原の駅から播但ばんたん線に乗って生野まで一人旅をした。
生れて初めての長旅である。
衆三の寄宿先は旅館を営んでいる伯父夫婦の家だった。玉江は衆三が自分に会うために一時間半も汽車に乗り、それから徒歩で山道を二十里、およそ二日がかりで通ってきたことにあらためて驚きの気持をもった。
が、訪ねて行った黒銀屋くろがねやには衆三はいなかった。冬の間に、図師衆三は鳥取県の沖ノ山に出かけて しまっていた。
身の定まらぬ暮らしに木地師仲間の一人が、別の木地師を紹介したのだった。玉江のことは聞いていたとみえ、一応のところは伯父夫婦は玉江を迎え入れてくれた。あわずりで家が土中に埋まったと告げたので同情されたのだ。
それにしても、衆三が連絡先を記した紙片を置いて行ってくれたので救かった。伯父夫婦の口ききで、玉

江は別の旅館で女中奉公をすることになった。

生野の街は、生野銀山を控えているので賑わいを見せていた。生野銀山の歴史は古い。豊臣の時代から発掘され、江戸時代、慶長の頃には生野奉行所が置かれた。

明治に入り新政府に引き継がれ、フランス人コワニーを招聘(しょうへい)生野銀山は近代工法により、発掘されるようになった。歴史上、様々な事件がこの地にはあった。囚人の使役、劣悪な労働条件、地下に封じ込められ命を失ったものも数知れず、明治四年には地租改正などを不満とした但・丹・播諸州の土民らが反乱、生野銀山焼打事件なども起っている。明治二十二年からは宮内省の管下となり、御料鉱山となった一時期もあった。鉱山本部表門には今も菊花紋章が飾られている。

明治二十九年には帝室財産の栄をになった生野銀山は民間合資会社に払い下げられ、のち、その鉱業会社の経営に任せられた。

この街に住んだことで、玉江の毎日は驚くほどの変り様を見せた。なによりも人の数の多さに圧倒された。娘たちは着飾り、男たちは威勢がよかった。

つくづくとおのが身が山家の猿であることを思い知らされた。ことばづかいから行儀作法、こと細かく注意される毎日であった。

修業中の身である衆三は一年目の小正月にも帰っては来なかった。一度、手紙を書き送ったが、着いたのか着かないのか、返事はなかった。

生野がふるさとではあったが、両親のない身であるためか、伯父夫婦のところには何の愛着もないようであった。玉江が十六になった時、芸者置屋に身を移された。世間知らずの小娘には大人たちの裏の取引きのことはわからなかった。

前にも増して手厳しく行儀作法を仕込まれた。

山仕事をしていた手に三味線の撥(ばち)は酷であ

った。本調子に二上り、三下り、何度、調子の合わせ方を教えられても、うまく音律を自分のものにすることが できなかった。

男と女のことは、姐さんの芸者たちの話を聞いているだけでずいぶんといろんなことを知った。

泣く泣く修業をしていた時、衆三の伯父の公市が玉江をそそのかした。もっといいところに紹介して やるから置屋を逃げ出せというのであった。

もちろん玉江は初穂をいただく旦那衆の一人に身を売ることになっているという。

公市は中に立った同業の旅館主のことを詰なしった。ある夜、公市に手を引かれ、裏の扇山に連れて行かれた。着のみ着のままで、暗い山中に入る。

やっと玉江は生き返った気になった。月明りがなくとも山の中ならひょいひょいと自由に歩けた。もの心つく頃から深山で過ごしたのだから暗い闇でも真昼間と同じことであった。

これまではただぼんやりと裏の山々を眺めていた。

山の中腹のあちこちに昔の坑口の跡があり、ぽっかりと口を開けていた。地下何千尺、その奥は縦横に曲がりくねった坑道になっているのであった。

立入禁止になっている坑口の破れた鉄柵をくぐり暗い穴に入る。しばらくたった時、坑口の入口に二人の男が立った。公市が きれいなべべ着て、ええ暮らしがでける」と玉江の背に告げた。

山越えし、生野の次の長谷の駅から汽車に乗り、瀬戸内に面した街、姫路に一泊してから神戸・福原の神力楼という遊郭に売られた。

この時代にはよくある話だった。

客をとらされることにそれほどの苦痛はなかった。

女の歓びをあらためて知らされる機会も何度かあった。福原には二年いた。十九歳で、神戸生田筋の乾物問屋の主人に身請けされた。

六十二歳の男だった。それほどの抵抗感は玉江に

はなかった。初めての男が義父の豊吉である。
玉江はこの老人のおもちゃのようなものだった。
もっぱら玉江のきれいな体を眺めるのが趣味で、二人の間にはほとんど行為はなかった。
肌を合わせて寝ているだけで回春剤になるとこの男は言った。が、ある日、男はその気になった。
玉江が口に含み男のものにやっと力を持たせた。度が過ぎた行為のさなかに心臓の発作を起し男は急に倒れた。いわゆる腹上死であった。
二人目の男を殺したようなものだった。
玉江はその時も男の股間の縮こまったものを見た。
「これやってる時が人間は生きてることやで」
と、口癖のように言っていた男がもう死んでいた。
自由の身になった上に、わずかではあったが手元に蓄えの金が残った。乾物屋の堅物の番頭があとを引き受け、まともになることを勧めた。
電鉄会社の社長のお屋敷で女中奉公したが続かなかった。次に自分で料亭の仲居の仕事を見つけてきた。齢は二十歳だったが、二十三歳と偽った。
誰れが見ても、もう玉江は一人前の女に見えた。いつか来たことのある姫路の街に移っていた。
昭和十四年の春、図師衆三はもう二十歳の若者になる。「二十になったら姫路の連隊で兵隊さんや。今はそのほうがええのんかも知れんな」といつか、この男は語ったことがある。
何度か、兵営の前に立ち中を窺った。
街行く新兵たちに気を配ったこともある。
姫路に行ってみようと思い立ったのは少しは図師衆三への想いがあったためかも知れない。
だが、そのうちに図師衆三のことは忘れた。
生れて初めて、玉江は大人の恋に身を焼き始めていた。料亭“播磨”の主人、葉室勝に、玉江は夢中になりかけていたのだ。

（第二章 了）